

### 3. 出演者インタビュー

——このプロジェクトに何を期待していますか？

**レンシン** 日本人との共同作業自体は初めてではありませんが、このように日本で一緒に作品を作るのは初めて。どうやって演出家やグループで作品を作ることになるのか興味を持っていました。いざ稽古が始まってみると、すごく細かい作業で！日本人がほとんどの中、私を含め皆でどんなものを作ることができるのかな、と今は興味深く思っています。

**ジュイチュー** 私は去年、日本でデラシネラの『Knife』という作品に参加しました。今回はそれとは違う新しい作品で、でもテーブルなど共通点がある。一体どんなことになるだろうと気になっています。

**崎山** ジュイチューさん、レンシンさんは女性で年齢も近いダンサーなので、とても楽しみにしていました。去年の『Knife』の時も、ジュイチューさんは思いがけない引き出しを持っていて、梶原さんのフリーダムな感じも新鮮で、「自由でいいんだ！」と、私も凝り固まった頭を刺激され、楽しかったんです。今回はレンシンさんが入ってまた新しい引き出しを見せてくれるでしょうし、私も負けじと引き出しを開けるぞ、と。そうでないといけないかと置かれてしまいますし、無茶する人が沢山いるので(笑)、何か大きいエネルギーが出せるのではないかという気がしています。

**梶原** 『Knife』では色々な文化の人が混じっていて刺激的でしたし、短期でのクリエイションだったのでドキキ感もあったのですが、今回は、その時と同じ装置をまた違うように使って、同じメンバーもいるけど新しいメンバーもいて……と、時間が経ってちょっと入れ替わるところもありながら、また新たな旅が始まること、未知なる世界に行くことを、楽しみにしていました。小野寺さんとは4回目のクリエイションですが、いつもとても細やかで正確な作業をなさるので、細胞がすごく刺激を受ける。いつも自由にやることが多いので、きちっと形に当てはめることの難しさや面白さを感じるんです。しかも、演劇とダンスの間のような表現で、自分らしさを持ちつつ、何か違う見え方はないかと常に探り続けているデラシネラさんの活動に私も触発されています。チャレンジさせてもらえて、若いダンサーたちと一緒にやらせていただけるのは、すごく恵まれてると思います。

**藤田** 日本でもそんなに多くの人と創作しているというわけでもないかもしれませんが、海外の方々や創作をすると、自分の中で普通だと思っていることがそうではないかもしれないと疑うことができます。小さな集団にいると気づけないことも、海外のレンシンさん、ジュイチューさんや、海外で活動している梶原さんに教わることは多いと思うので、それがどう作品になるのか楽しみです。

——レンシンさん、ジュイチューさん、梶原さんは、ホテルでの隔離期間中、どんなことを？

**レンシン** 小野寺さんからラップフィルムを使って何かできないかという課題を渡されていたので、ホテルの部屋であれこれ試行錯誤しました。アイデアを覚えておいて、小野寺さんたちにメールして。今も稽古場で引き続き取り組んでいます。ソロシーンで使うことになっています。

**ジュイチュー** 隔離期間中、最初の2日は、プロットを読み返していました。中国語に翻訳するのが大変で。その後はジャグリングをしたり、ベッドでエクササイズをしたり、即興で動いてみたり。最後の4日は送ってもらった動画を見てソロの動きを覚えたり考えたりしていました。私のソロは、オフィスレディのキャラクターと決まっていて、動物と人間の間の動きなのですが、そのイメー

ジ動画をもらい、「どうなのがいいか考えておいて」と宿題をもらったんです。

**梶原** 私は作品のモチーフとなる『動物農場』を読み直していました。今回はスケジュール的に、稽古の開始後すぐに参加できることがわかっていたので、ヨガやピラティスなどのトレーニング、それから時々、インプロビゼーションもしつつ、体力温存をしていました(笑)。

——新型コロナウイルスの影響で、通常とは勝手が違うことも多いかと思いますが、いかがですか？

**藤田** 『Knife』もコロナで中止の確率も高い中、奇跡的に公演できたのですが(出演者に陽性者が出て11月の公演が一度中止になり、12月上旬に実施)、今回も奇跡的な感じで集まることができ幸運だなと思っています。

**崎山** コロナ下でのリハーサルにも随分慣れましたが、海外からの出演者がいて、隔離期間もあって時間がない中で創作するという意味では、英語で書いて説明がすぐできるように、という準備は、去年の経験が生きていると思います。「プロローグ」などと名前をつけて英語で言うなど、よりクリアに伝えられる工夫が、今回は前回よりできています。

**梶原** 本当に、すごくできている印象を受けます。丁寧に作ってくださっていて安心です。(外国人の)二人は、準備しなければならない書類が多くて大変だったでしょ？

**レンシン** そうですね。でもそれは、大丈夫です(笑)。コロナ対策に関しても、問題は感じません。マレーシアではここ数か月、感染状況がかなり悪くて、イベントが一切行われていないので、ここに来ることができてただただ感謝しています。

**ジュイチュー** コロナのせいでこの2年間、海外に出ることが難しくなったので、このプロジェクトへの参加によって珍しい経験ができて嬉しく、感謝しています。台湾は感染者が少なくかなり安全なので、私の両親は、日本の状況を心配しています。でも私は、日本が入国禁止になったらしかたないけれど、そうであれば行く、と決めていました。だって、デラシネラさんたちとの共同作業はとても楽しく、毎分毎秒がパフォーマーとしての私には大きな経験で、すごく幸せだから。それは台湾では味わえないものだとは私は感じているんです。

——小野寺さんの演出の印象を教えてください。

**レンシン** 小野寺さんの演出は、観客からの見え方をよく考えていますね。桃子さんなど他の人にも「見て」と頼んで客観的にとらえようとするのも印象的です。私にとって、彼がどれだけ注意深く観客からの見え方を考えるかを知るのは面白いし、ここであれこれトライしたり、小野寺さんから動きの効果を説明してもらったり、観客からの見え方を変えようと試みたりするのも楽しいです。

**ジュイチュー** 小野寺さんはとにかく発想が自由。可能性に満ちています。彼との稽古では、自分に何ができるのかについて、様々なトライができる。ダンス、ムーヴメント、アクション、アクティング、マイム……全てが含まれ、全てをまとめあげている。そのことが、私自身の発想をも自由にしてくれます。

**梶原** エネルギッシュですよ。その熱量に惹かれて一緒に熱くなっちゃう。でも時々早く行き過ぎるので「TGV(フランスの高速列車)」って(笑)。小野寺さんが重視するのは、動き、シチュエーション、そして、人。人って何だろう、人って面白いよね、というのがちりばめられていて、それを、試行錯誤して探

していくのが、面白いし難しい。でも明確にヴィジョンがある方なので、信用してついていくって感じです。普段から小野寺さんと一緒にやってる仲間はやっぱりさすがで、小野寺さんも皆に支えられている。グループワークなんだなと感じます。そこに私も時々、「お邪魔します」とやらせていただけるのが、とても嬉しくて。私はフランス在住でフランスなどヨーロッパの人とも仕事をしますが、その方によってやり方は本当に様々。だから、まずは白紙になって、「あ、今回はこういうカラー、こういう絵なんだな」ということを経験していくのが、楽しいです。

**崎山** 私は小野寺さんとはいつも一緒にしています。大きなお題をどんと渡される時や、「これが見せたい」というものがクリアな時や、「こういう雰囲気を」と言われた時など、何種類かあるのですが、「どうやったらいいかな?」と聞かれて、皆で「こうやりましょう」と作って出来上がる感じが楽しいです。

**藤田** ぐるぐる回って、今、マイムに戻ってきた感じがあります。歳を重ねてまたマイムに向かった時、どんどん踊っちゃうとかどんどん動いちゃうとかどんどんセリフを喋っちゃう、というのではなく、ぼかんとした空白を渡してもちゃんと存在できるというか、「ハイ、あなたにこの場を渡します」と言った時にちゃんと“立てる”人たちと一緒にできるのは、本当にすごい機会だなと思っています。

——今、この稽古場で一番楽しいことは？

**崎山** 全然喋れないけれど動いたら伝わるのが、すごいことだなと感じます。「ザーって感じで！」みたいに伝えてとりあえずやってみると案外、雰囲気伝わっていたりキャッチできたりして、そこにまた一個、色を加えられるのが、すごくスペシャルなことに思えます。

**ジュイチュー** 何もかもが面白いです。沢山の言語が飛び交っているけれど、でも時には言語なしでも、雰囲気やお互いを見合うことで、何が問題なのか、何が起きているのか、わかるんです。

**レンシン** 誰もがより良いものを見つけようとしているところ、でしょうか。私としては、もっと皆さんの言葉がわかれば、さらにイメージをシェアできるのにな、と思うことがあります。

**梶原** 私自身、フランスに渡った当初、全く話せなくて、フランス語が飛び交う中、日本人一人でクリエイションしたことがあります。だからレンシンさんの、「言葉がわかったら」という気持ちもわかるんですが、ダンスやマイムといったノンバーバルコミュニケーションで繋がっている強さもある。言葉以上に、第六感を使って理解することのほうが重要だったりして、そこがこういう国際的なプロジェクトの面白さだと思います。

**藤田** 本当に、「もっと英語が喋れたら」と毎年、心から思うのですが、稽古場や舞台上で対峙した時、その人そのものがすごく理解できる瞬間もある。言葉がない状況でわかり合えた瞬間は、とても嬉しく感じますね。

#### 4. 小野寺修二コメント

**小野寺** 稽古が始まってみて、このキャストینگが正解だったと確信しています。レンシンさん、ジュイチューさんはきちんとキャッチし、アウトプットしてくれる。今の稽古場でのコミュニケーションを全て肯定する気はなく、僕がもっと細部まで説明できるような語学の勉強をしなくていいとは思っていませんが、何かが不足していることを新しい表現の可能性として使えるのではないかと感じています。というのも、自分が今、形としてパーフェクトであるマイム

より、足りていないことを美しく思うようなマイムを目指しているから。ただ立っているだけで魅力的だったり、人が出会って関係を作るところから色々な想像が生まれたりということを重視していて、そういう時に強いのは、説明をしない身体である気がするんです。

実際、全部わかってできるものと、感覚で拾って出してくるものとは、かなり違いますし、自分にとっても、クリエイションというものをもう一回考えるチャンス。日本語がわかる人が相手だと、僕はぐだぐだと喋ってしまうのですが、この現場ではそれが難しいので、すごく簡単な単語を言ってみて、それに対して動いてもらって「速い」「遅い」「もっと速う速度感で」などと言い、それを各々が自分の感覚で決めていく。で、それに「NO」と言ったり「YES」と言ったり。普段だったらかなり自分の中で決まっているのに対して、今回は足りない部分があるから逆に「お願いします」みたいな形でやっていて、皆のおかげでワクワクすることが多くなっています。だからこれは、彼女たちが感じて出てきたものを、僕が正しくセレクトできるかどうかという勝負。その上で、通訳の方が来てくれる日もあるので、種明かしではないけれど、あとから「ああ、こういうことを言っていたんだ、あの人」みたいになるのも面白いかな、と思ったり。皆にストレスを与えているという反省もあるのですが、そのおかげで思いがけない発見もあり、とても楽しいです。

#### 5. 所感

事前にはZoomなどを大いに活用しての創作になるのかと想像していたが、やはり現場で直接会うことができてから、一挙に創作が進んだ感がある。その分、本番までの時間は限られているのだが、皆、経験を積んできたパフォーマーだけに、それぞれの準備を経て、稽古場で最大限に力を発揮している。